

日中の「茶」に関する諺に見る取り合わせ語句の対照比較考察

中国中央财经大学外国语学院 王 雪

広島大学留学生センター 浮田三郎

1. 考察背景

諺は古くから言い慣らわされ、日常生活の真理を凝縮した簡潔な表現である。諺は庶民生活の体験的な知恵から生み出されたものが多いが、古典に含まれた格言や故事などから出て、いつのまにか俗間に流布したものも含まれる。諺にはさまざまな比喩表現が含まれている。そしてそこには、ある事物とある物事（語句）を取り合わせた表現が織り込まれており、そこに人々のことば遊びの知恵のようなものから人生哲学的な考え方の結晶といったものまで見ることができる。関本（1983：26）は、「諺は、簡潔で、しかも含蓄のある表現の中に、庶民の生活の知恵を盛り込んだものであり、そこでは少ない単語で大きい効果をあげるために修辞法上のさまざまな技法が用いられている」と述べている。日中両言語の諺から見た取り合わせ語句を対照比較してみると、両国民がどんなことに関心を持っていたかということを知ることができる。

以前「酒に関する諺」の対照比較考察を試みたが（cf. 王雪・浮田三郎, 2011）、「茶」に関しても、日中両国の関係やそれぞれの茶の発展には興味深いものがある。賈惠萱（1998：198-202）は、茶の起源、広がり、東伝などについて、次のように書いている¹。

茶は中国に起源があり、神農の時代に飲茶が始まったといわれている。二千年余り前、中国では茶木栽培が始まった。三世紀ごろには、雲南・四川一帯では茶栽培が相当普及していた。五世紀に飲茶の習俗は南方から徐々に北へ向かい、七世紀には西北、チベットに伝わった。唐代の茶聖陸羽が著した『茶経』には、茶の飲用は神農に始まると記され、『神農氏草経』には茶の効用について、神農は百草を嗜んだがある日七十二毒に遭い、茶を飲んで解毒したとあり、中国では四千年前にすでに茶を飲んで病を治した人がいた。茶の飲用は周秦に始まり、まず上層級、次に徐々に一般の人々に広まり、漢代には民間の飲茶の風俗はすでに盛んになっており、茶を入れる技芸が研究され始めた。漢の宣武帝の時代、王褒の撰した『僮約』には茶道具についての記述がある。唐の全盛期には飲茶の風習は全国に広がり、茶の文化として最盛期に向かい始めた。生老病死、婚礼、葬式、交際等はみな茶と切っても切れないものとなった。中国の茶は奈良時代に日本に伝わった。日本の『茶経』注釈書である『茶経詳説』によれば、天平元年（729）聖武天皇が宮中に僧侶百人を招いて大般若経を講義させた折り、翌日文武百官に茶を贈った。天平勝宝元年（749）孝謙天皇は奈良の東大寺に五千人の僧侶を招集し、盧遮那仏

¹ 宮田登・馬興国編（1998）『日中文化交流史叢書 第5巻民俗』の中の第二章「飲食の民俗」は賈惠萱によって、書かれたものである。163-212 ページを参照。

の前で読経し、やはり茶を贈って慰労した。その時の茶はいうまでもなく中国から伝来したもので、大変珍しく貴重なものであった。宝亀年間（770-780）、西明寺の禅侶永忠は遣唐僧として中国に渡り、三十年間生活し、六十三歳の時、茶木の実を日本に持ち帰り、比叡山山麓の坂本に植えた。八〇六年六月、朝廷に上書し、齋日には茶を飲むことを願い出、大唐の風俗を認めさせた。『日本後紀』によれば、弘仁六年（815）四月二十二日、琵琶湖畔の梵釈寺に近江行幸の嵯峨天皇を迎えに赴いた永忠は、自ら茶を立てて進上した。嵯峨天皇は永忠の献上した茶を褒め、二ヵ月後、近江・近畿・播磨等の地に植木を植えるよう命じ、毎年収穫した茶葉は天皇への献上品とされた。

また、布目（1998：249）は、「嵯峨・淳和両天皇のころ（809 - 833）、唐風文化の盛行と共に、天皇はじめ貴族層にかなり浸透した喫茶は、その後、国風文化の時代に移行すると、だんだん衰退してしまったようである」と述べ、さらに、「十二世紀末に、栄西は中国から茶種を持ち帰って飲茶を再興し、『喫茶養生記』を著わし、仏寺や武家層にも飲茶を普及させた。その中でとくに禅院においては、飲茶が座禅の時の飲料としてだけでなく、仏教行事の中に儀礼として取り入れられ、飲茶の儀礼化はやがて十六世紀後半に至って千利休による茶道の成立への一つの道を開くことになった」と指摘している。このように、日本は、中国の影響を受け、さらに独自の発想で茶文化を大いに発展させていると言える。

本稿では、両言語の諺に見られる取り合わせ語句を対照比較考察することによって、両言語の諺に見られるそれぞれの言語社会の背景、生活様式、風俗、文化を、そしてそれを背景にした表現の特徴と類似点や相違点を明かにすることを目的とする。また、それにより、我々がそれぞれ両言語の表現の豊かさに注目するだけでなく、諺の意味解明や、諺の内層的な意味の理解をさらに深めることができるようになればと思う。

2. 考察対象と方法

まず、日本語の諺の用例は『故事・俗信ことわざ大辞典』（尚学図書編集、1981）を資料に、諺を取り出す。『故事・俗信大辞典』は専門事典としてこれまでにみられない規模のものとなっている。一方、中国語の諺は、温端政などが編集した『中国谚语大全』（2004）を中心に、諺の用例を取り出した。この辞典は、約十万項目の諺を集録している。中国の現代諺辞書において、諺の数で最も規模の大きい諺辞典である。その中で、日本語の「茶」に関する諺を TJ という符号をつけ、168 句を抽出し、中国語の「茶」に関する諺を TC という符号をつけ、111 句を抽出した。「茶」は日中両国の国民にとって、最も身近に感じ、日常生活の中でよく飲まれるものであり、これらの諺に見られる表現の仕方を見てみると、普段人々が考えている生活の知恵や教訓も窺える。考察方法として、両言語の「茶」に関する諺に現れる語句は事項別に、動植物、衣食住、人、時空、身体、抽象及び行為の六項目に分けて、それぞれ諺の中でどのように使用されているかを検討してみる。また、両国の国民にどのような言葉が使われる表現が親しまれているかということも明らかになる。

3. 両言語の「茶」に関する諺に見られる取り合わせ語句の特徴

諺の中で、様々な取り合わせ語句が諺の中で現われることから、人間がこれらの諺を創作する時、大切に思ったり、親しんだりしていることがどんなことであるかが窺える。具体的に今回の分析にあたり、諺に両言語の各項目を表わす取り合わせ語句の特徴は、共通するところもあれば、相違するところもある。

3.1 動植物を表す語句

(日) TJ1 「猫も茶を飲む」

(中) TC1 「蚕是白老虎，茶是黑老虎」(蚕は白い虎であり、茶は黒い虎である) TC2 「小虫变大灾」(小さな虫が大きな災難になる) TC3 「隔夜茶，毒过蛇」(一夜越しの茶は蛇より毒がある) TC4 「立夏茶，夜夜老，小满后茶变草」(立夏の茶、毎晩古くなり、小満の後、茶は草になる) TC5 「茶叶好比时辰草，日日采来夜夜炒」(茶の葉は時機の草であり、毎日摘み毎晩炒める) TC6 「茶叶本是时辰草，早三日是宝，迟三日是草」(茶の葉は元々時機草、三日早くなると宝になり、三日遅くなると草になる)

動植物を表わす語句に関しては、日本語の諺では、「猫」だけを取り上げ、動植物を表わす取り合わせ語句はほかにはないことが分かる。中国語の諺では、「虎」、「虫」、「蛇」、「草」等を取り上げ、動植物を表わす取り合わせ語句が多いことが見られる。日本語の諺では、「猫」が茶を飲むことは自分に相応しくないことをするようなことであると述べている。中国語の諺では、「虎」の勢いで茶の生長を喩えている。蛇の特徴を利用し、茶が蛇より毒があると述べている。

3.2 衣食住を表す語句

3.2.1 衣

(日) TJ2 「着物は長持ちから、茶はカンスから」

TJ3 「袖引き煙草に押し付け茶」

3.2.2 食

(一) 茶の葉

(日) TJ4 「茶柱が立つと縁起がよい」 TJ5 「茶柱が立つと子ができる」 TJ6 「茶柱が立つと来客がある」 TJ7 「手についた石油の臭いは茶の葉を焼いた煙をあてると消える」 TJ8 「茶殻も肥やしになる」

(中) TC6 「茶叶本是时辰草，早三日是宝，迟三日是草」

(二) 茶の味

(日) TJ9 「濃い茶目の毒気の薬」 TJ10 「濃い茶を飲むと色の黒い子が生まれる」 TJ11 「濃茶を飲めば鬚が濃くなる」 TJ12 「苦い茶を飲めば色が黒くなる」

(中) TC8 「浓茶冲倦意，香烟伴失眠」 TC9 「浓茶解酒」 TC10 「浓茶猛烟，少活十年」 TC11 「素食清茶，爽口爽心」 TC12 「清茶一杯在手，能解疾病与忧愁」 TC13 「清茶一杯，親密無間」

(三) 茶の品種

(日) TJ13 「仲人にはお茶の代わりに昆布茶²を出す」 TJ14 「鬼も十八、番茶³も出花」

(中) TC14 「吃萝卜，喝姜茶，大夫急得满街爬」

TC15 「烫茶伤人，姜茶治病」 TC16 「姜茶治病，糖茶和胃」 TC17 「喝了碧螺春，精神增三分」 TC18 「喝福建茶，余味无穷；听福建戏，余音缭绕」 TC19 「绿茶爽口，红茶醇厚」 TC20 「绿叶红镶边，七泡有余香」 TC21 「红茶黑茶老青茶，洞庭湖中君山茶」 TC22 「油茶奶茶⁴甘露茶，顶不上回回的盖碗茶」 TC23 「砖茶离不开盐巴，英雄离不开骏马」

(四) 茶を飲む時間

(日) TJ15 「朝茶に梅干を食らえば一日の災難を免れる」 TJ16 「朝茶に別れるな」 TJ17 「朝茶は七里帰っても飲め」 TJ18 「朝茶はその日の祈祷」 TJ19 「朝茶を飲むとその日の難を逃れる」 TJ20 「朝茶の塩」

(中) TC24 「早茶晚酒」 TC25 「清早茶一杯，金榜中高魁」 TC26 「清晨一杯茶，饿死卖药家」

(五) 食べ物や調味料

① 茶と飯

(日) TJ21 「飯へ多く茶を掛けることの好きな者は実意がない」 TJ22 「朝飯に汁をかけて食うと出世できぬ」 TJ23 「御強御飯にお茶をかけて食べると結婚式に雨が降る」 TJ24 「熱いご飯にお茶をかけて食ってはいけない」

(中) TC27 「茶飯依时人长肉，按时施肥田收谷」 TC28 「茶飯宜清淡，少盐少疾病」 TC29 「茶头酒尾飯中间」

② 茶漬け

(日) TJ25 「朝、茶漬けを食って仕事に出ると怪我をする」 TJ26 「強飯を茶漬けにして食うと嫁入りのとき雨が降る」 TJ27 「朝腹に茶漬け」 TJ28 「玄関のお茶漬けを食う」 TJ29 「搗き白で茶漬け食う」 TJ30 「茶漬けに香の物」 TJ31 「茶漬けに鯉（ひしこ）の望み」 TJ32 「松前の殿様鯉でお茶漬け」 TJ33 「麦飯のこうこの茶漬け」 TJ34 「有馬の茶漬け」 TJ35 「遠州の何なら茶漬け」 TJ36 「大橋の茶漬け」 TJ37 「京のお茶漬け」

③ 調味料、その他

(日) TJ30 「茶漬けに香の物」 TJ31 「茶漬けに鯉（ひしこ）の望み」 TJ32 「松前の殿様鯉でお茶漬け」 TJ33 「麦飯のこうこの茶漬け」 TJ38 「元日の朝お茶に梅干に入れて呑むと一年中の災難を免れる」 TJ15 「朝茶に梅干を食らえば一日の災難を免れる」 TJ39 「沢庵の香の物を茶に入れて食うと口が臭くなる」 TJ40 「お茶の子さいさい」 TJ41 「茶の子煎ると心が分かる」 TJ42 「鰻鮓を茶で食う」 TJ43 「七五三のご馳走もお茶一杯」 TJ44 「柿を食って茶を飲むと腰が抜ける」

(中) TC14 「吃萝卜，喝姜茶，大夫急得满街爬」 TC23 「砖茶离不开盐巴，英雄离不开骏马」 TC30 「茶没盐，水

² 「昆布茶」とは、コンブを乾燥させ細かく刻んで粉末状にしたものに湯をそそいで飲む飲料である。軽く塩味をつけた物や、あられを配合した物、玉露を加えた物もある。

³ 「番茶」は、緑茶の一種である。その製法は煎茶とほぼ同一であるが、原料として、夏以降に収穫した茶葉（三番茶・四番茶）・次期の栽培に向けて枝を整形したときの茶葉（秋冬番茶）・煎茶の製造工程ではじかれた大きな葉などを用いている。

⁴ 「乳茶」はモンゴル族が三度の食事に欠かせない茶である。「乳茶」は煉瓦茶を砕いてから鉄鍋に入れ、水を加えて十分ほど煮る。茶がよく出たところへあらかじめ煮ておいた牛乳の鍋に移し、塩を加えれば出来上がりである。

一般」

(六) 嗜好品

(日) TJ3 「袖引き煙草に押し付け茶」 TJ45 「濁酒も茶よりは勝る」 TJ46 「薄酒も茶より勝り醜婦も空房よりはすぐれたり」

(中) TC24 「早茶晚酒」 TC31 「茶七飯八酒加倍」 TC32 「浅杯茶，满杯酒」 TC33 「酒满敬人，茶满伤人」 TC34 「客到茶烟起」 TC35 「时新茶叶陈年酒」 TC36 「酒吃头杯，茶吃二盏」 TC37 「吸烟吸头，喝茶喝尾」 TC38 「不喝隔夜茶，不喝过量酒」 TC39 「饭后饮茶助消化，酒后饮茶能解醉」 TC40 「粗茶淡飯少喝酒，一定活到九十九」 TC41 「好茶者不入酒楼」 TC42 「烟酒是亲家，烟茶是冤家」

(七) 茶の品質

(日) TJ47 「よい茶の飲み置き」

(中) TC43 「好茶敬上賓，次茶等常客」 TC44 「好茶是个宝，坏茶一堆草」 TC45 「好茶一杯，精神百倍」 TC46 「好茶一杯，不用请医家」 TC47 「好茶一杯动心凉，好花一朵满园香」

(八) 茶と関わる場所

(日) TJ48 「酒は酒屋に茶は茶屋に」 TJ49 「茶屋の餅も強いねば食えぬ」 TJ50 「茶所は嫁誇り所」 TJ51 「宇治は茶所、茶は縁所」

(中) TC48 「吃酒不进茶房」 TC49 「茶坊酒馆议闲事」 TC50 「茶馆剃头铺，说话看前后」 TC51 「茶馆酒肆，没有撮朋友的」 TC52 「茶坊酒店最难开」

(九) 茶と茶具

(日) TJ52 「石臼芸より茶臼芸」 TJ53 「石臼切らんより茶臼切れ」 TJ54 「着物は長持ちから、茶はカンスから」 TJ55 「茶碗を投げれば、綿で抱えよ」 TJ56 「茶碗と茶碗」 TJ57 「茶碗の尻を手に付ける」 TJ58 「茶碗の中の針を磁石で回すよう」 TJ59 「茶碗に箸を立てると人が死ぬ」 TJ60 「茶碗に箸を立てると不幸がある」 TJ61 「茶碗に水を入れ、箸を十文字に乗せ、四方から飲むとしゃっくりが治る」 TJ62 「茶碗を叩くと餓鬼が寄る」 TJ63 「茶碗を叩けば唾（おし）になる」 TJ64 「茶碗を箸で叩くと貧乏神が来る」 TJ65 「茶を硯水に使えば書置きとなる」

(中) TC53 「茶是草，箸是宝」 TC54 「茶瓶用瓦，如乘折脚駿登高」、TC55 「茶缸虽小排桌上、尿壶虽大放床下」

3.2.3 住

(日) TJ28 「玄関のお茶漬けを食う」 TJ66 「風呂の中でお茶を飲むと風邪が治る」 TJ67 「茶は屋根葺きほど飲む」 TJ68 「食前のお茶は壁下地洗うが如し」

まず、日本語の諺では、着物、袖など衣類の付属物と「茶」の取り合わせによって、昔の遊女の道楽形態が見られる。しかし、中国語の諺では、「茶」と取り合わせのある「衣」に関する語句が見当たらない。

茶の葉に関し、日本語の諺では、「茶柱」、「茶の葉」、「茶殻」とそれぞれの役割などが、中国語の諺では、「茶殻」だけが取り上げられている。茶の品種において、「昆布茶」と「番茶」だけが見られ、茶の品種を述べる日本語の諺は数少ないと言わざるをえない。一方、中国語の諺では、数多くの茶の品種と中国の少数民族の茶を取り上げている。両言語の諺で共通に見られるのは、「朝茶」である。「朝茶」は両国の民衆に親しまれていることが窺える。また、食べ

物や調味料では、日本語の諺では、主食「飯」以外、漬物「香の物」、海の魚「鯡」、「鯿」と果物などが見られ、中国語の諺では、飯、調味料、特に塩、また人参などが見られる。それぞれの国における特色のある食べ物と茶文化の違いが見られる。

また、嗜好品の中で、日本語の諺では、もてなしや会食などのときは「濁酒」や「薄酒」の方が「茶」より好まれることを示唆しているが、「茶」も古くから中国でも日本でももてなしのときなどに使用されている。特に、酒を好む人にとっては、「薄酒」でも、「茶」より「酒」という考え方が窺えるが、「酒」と「煙草」と「茶」で昔から現代までの社会風景が表わされている。中国語の諺では、茶、酒、煙草は客を招待する時に、必ず使うものだとして強調している。

茶の品質に関し、日本語の諺には「よい茶」だけ出ているが、中国語の諺には「よい茶」、「悪い茶」、「劣る茶」など正反対から茶を述べている。そして、茶と関わる場所に関し、両言語の諺ともに、茶を飲む場所を指している。

茶と茶具に関し、日本語の諺では、茶をひく「茶臼」、茶を煮る「カンス」、茶を盛る器具「茶碗」を取り上げ、しかも、「茶碗」という言葉は諺の中で十一回も取り入れることによって、最も日本人に親しまれる茶の器具も茶碗であることが窺える。中国語の諺では、茶の葉を盛る「茶瓶」、茶の葉を盛るための器具に使う材料「箬」、茶を盛る「茶缸」を取り上げている。中国人は茶の葉を盛る茶瓶にどんな材料が使われているかによって、その人が茶を重要視する度合いも見られると考えている。また、物事の価値は大小で見分けてはならないことを示唆している。さらに、住居と茶の取り合わせで、忙しい様子、人間生活の様々な側面と人間の健康養生を描いている。

3.3 人体を表す語句

(日) TJ69「お初のお茶を飲むと早く白髪が出る」 TJ70「濃茶を飲めば鬚が濃くなる」 TJ71「飯の後に茶を飲まぬと喉に毛が生える」 TJ72「病み且に茶を塗る」 TJ73「病む且に茶」 TJ74「病且に茶を塗ったような日和」 TJ79「濃い茶は且の毒気の薬」 TJ75「茶を頭につけければ頭痛が治る」 TJ76「茶の木の下を頬被りして通るよう」 TJ77「茶腹も一時」 TJ78「お臍で(が)お茶を沸かす」 TJ79「臍が茶を沸かす」 TJ80「その口へ茶を飲むな」 TJ81「沢庵の香の物を茶に入れて食うと口が臭くなる」 TJ41「茶の子煎ると心が分かる」

(中) TC56「喝了茶，粘了牙；喝了酒，粘了口」 TC57「常喝茶，少烂牙」 TC11「素食清茶，爽口爽心」 TC19「绿茶爽口，红茶醇厚」 TC58「冷茶饿酒断肠丸」 TC59「肚子里没有病，喝茶也会胖起来」 TC60「喝了冷茶水，肚里直闹鬼」 TC61「茶喝多了养身，酒喝多了伤身」 TC62「空腹喝茶人心慌，隔夜茶叶伤肠胃」 TC63「空肚茶，人心慌；过量茶，人易瘦」 TC64「茶逢知己千杯少，壶中共抛一片心」

日本語の諺では、「白髪」、「鬚」、「喉」、「目」、「頭」、「頬」、「口」という頭部を表わす語句が多い。一方、中国語の諺では、「歯」、「口」、という頭部を表わす語句が少ない。逆に、日本語の諺では、「腹」、「臍」、「心」という胴体部を表わす語句が少ないことに対し、中国語の諺では、「腸」、「胃」、「腹」、「身」、「心」という胴体部の語句が多い。日本語の諺では、茶を飲むことは、頭部などの身体部位に対する影響が大きいと強調され、一方、中国語の諺では、茶

を飲むことは、胴体部の身体部位に及ぼす影響が大きいと強調されている。

両言語の諺を見てみると、日本語の諺では、人体部位を表わす茶と取り合わせの語句では、頭部を表わすものが多く見られる。中では、諺は俗信、俗説という形で、茶は人間の体にどんな影響を及ぼすかを述べるものが多い。茶と人体部位の取り合わせで作られた比喻表現も多用されている。また、胴体部、四肢部を表わす語句もある。

一方、中国語の諺では、頭部を表わす語句より、胴体部を表わす語句のほうが多く見られる。茶と胴体部にある「腹」、「腸」、「心」、「身」の取り合わせで、茶と健康養生の関係を述べ、茶と「口」の取り合わせで、茶の質・味を述べ、また、「茶」と「心」の取り合わせで、茶を飲むことで結ばれた友情関係などに言及している。

3.4 自然・天候・農業を表す語句

(日) TJ17「朝茶は七里帰っても飲め」 TJ18「朝茶はその日の祈祷」 TJ19「朝茶を飲むとその日の難を逃れる」 TJ82「八十八夜⁵に摘んだお茶を飲むと中風にかからない」 TJ83「初午に茶を飲めば火に祟る」 TJ84「初午の日に茶を出さない」 TJ85「病目に茶を塗ったような日和」 TJ86「茶の初穂を飲むと憎まれる」 TJ8「茶殻も肥やしになる」

(中) TC65「酒里乾坤大，茶中日月长」 TC14「吃萝卜，喝姜茶，大夫急得满街爬」 TC7「喝茶不喝茶底子，坐车不坐车尾子」 TC66「山间竹里人家，清香嫩蕊黄芽」 TC67「高山雾多出名茶」 TC68「平地有好花，高山有好茶」 TC69「细雨足时茶户喜」 TC70「惊蛰过，茶脱壳」 TC71「谷雨茶，满地抓」 TC72「清明发芽，谷雨采茶」 TC73「春茶一把，夏茶一头」

日本語の諺では、「七里」で空間を離れても、「その日」という時間帯で、朝茶を飲む重要性を述べている。また、「八十八夜」で茶を摘んだり、「初午」で茶を飲んだり出したりすると、不吉なことになると述べている。そして、「初穂」、「肥やし」は農業でよく見かけるものであり、茶の初穂を飲んではいけない、茶殻も肥やしになるという考えも窺える。

一方、中国語の諺では、茶の栽培と関わる「山間」、「高山」といった自然環境や、「霧」、「小ぬか雨」、「啓蟄」、「穀雨」[2]、「清明」、「春」、「夏」といった天候は茶に与える影響を示している。

中国語の諺の中で、自然環境、天候、農業関係に関する術語が多いことから、中国では、茶の栽培と茶の採集時期、茶の生長環境がよほど重視されていることが窺える。天候に関し、特に二十四節気における「啓蟄」、「穀雨」、「清明」は茶木の成長に対する影響が大きいことも見られる。

両国とも、天候、農業と関わる茶を摘むことに言及している。ただ、日本語の諺は俗説とい

⁵ 「八十八夜」は立春から八十八日目である。陰暦五月一〜二日頃にあたり、播種の適期とされる。茶所では茶摘みの最盛期となる。日本独自の暦日である。『広辞苑 第五版』1998：2149

う形で、中国語の諺は農諺という形で述べている。また、日本語の諺では、時間と空間によって、茶を飲まなくてはならない、飲んではいけないということが述べられている。それに対し、中国語の諺では、茶の栽培、生長、採集に関する諺は数的に、日本語の諺より多い。中国は農業を主な産業とする国なので、農作業に目を向け、農業生活で用いられる経験も数多く諺に反映され、現在でもよく使われる「農諺」になるわけである。

3.5 人を表す語句

(日) TJ5「茶柱が立つと子ができる」、TJ6「茶柱が立つと来客がある」、TJ87「子供が茶を飲めば風が吹く」、TJ88「結婚の約束がまともならぬ内は仲人に茶を出すな」、TJ13「仲人にはお茶の代わりに昆布茶を出す」、TJ89「憎い人にはお茶をたくさん注ぐ」、TJ90「若い女の摘んだ茶は同じ茶でも良い」、TJ91「愚かなる夫を待てば茶も冷ゆる」、TJ46「薄酒も茶より勝り醜婦も空房よりはすぐれたり」、TJ92「茶人文盲」、TJ93「茶と百姓は絞るほど出る」

(中) TC14「吃萝卜，喝姜茶，大夫急得满街爬」（大根を食べ、生姜茶を飲めば、医者は街を這い回るほど焦る）、TC74「萝卜就茶，气得大夫满地爬」（大根に茶、医者は這い回るほど怒る）、TC75「好茶敬上宾，次茶等常客」（よい茶は上等の賓客に差し上げ、劣る茶は常連客を待つ）、TC76「客从远方来，多以茶相待」（遠方よりの客は、多くの場合茶で招待する）、TC77「茶为花博士，酒为色媒人」（茶は花博士、酒は色の仲人）、TC78「当了三年茶博士，不会说话也会说」（三年茶博士になり、口がうまくない人も口がうまくなる）、TC79「跟着好人喝茶酒，跟着坏人挨棍棒」（よい人に従うと、茶酒を飲み、悪い人に従うと、棒で殴られる）、TC80「从来佳茶如佳人」（従来佳茶は佳人の如し）

「人」を表わす取り合わせ語句の中で、両国の諺では、それぞれ様々な人物と人間像が諺の中に登場している。その中で、両国ともに、「客」と「女」に言及している。茶を入れることは、客を招待する礼儀の一種として、両国の民衆に見なされる。一方、「女」と「茶」との切っても切れない関係は、諺の中で明らかに反映している。日本語の諺では、女が摘む茶はおいしいことが見られ、中国語の諺では、女をおいしい茶に喩えるということが見られる。そして、日本語の諺では、俗信から見た日本人の生活習慣、礼儀作法などが窺える。中国語の諺では、健康養生、人間同士の付き合いに対する戒めなどが窺える。

3.6 抽象及び行為を表す語句

(日) TJ4「茶柱が立つと縁起がよい」、TJ9「濃い茶目の毒気の薬」、TJ18「朝茶はその日の祈祷」、TJ19「朝茶を飲むとその日の難を逃れる」、TJ38「元日の朝お茶に梅干に入れて呑むと一年中の災難を免れる」、TJ94「家を出る時茶を飲めば災難にかからぬ」、TJ95「茶の木を植える時自分の影を穴に植え込むと死ぬ」、TJ96「茶の木を植えると死人が出る」、TJ23「御強御飯にお茶をかけて食べると結婚式に雨が降る」、TJ88「結婚の約束がまともならぬ内は仲人に茶を出すな」、TJ97「食後にお茶を飲まないと嘘つきになる」、TJ65「茶を硯水に使えば書置きとなる」、TJ66「風呂の中でお茶を飲むと風邪が治る」、TJ75「茶を頭につければ頭痛が治る」、TJ82「十八夜に摘んだお茶を飲むと中風にかからない」、TJ47「よい茶の飲み置き」、TJ14「鬼も十八、番茶も出花」、

TJ43「七五三のご馳走もお茶一杯」、TJ98「余り茶に福がある」

(中) TC3「隔夜茶，毒过蛇」（一夜越しの茶は蛇より毒がある）、TC81「不喝生水多喝水，不拉稀来不发痧」（生の水を飲まず、茶を多く飲み、下痢もせず、夏ばてもしない）、TC82「吃了元宵茶，男做工入女织麻；吃了元宵果，各人寻生活」（元宵の茶を飲んだら、男は仕事、女は亜麻を織り、元宵の果物を食べ、それぞれの生きる道を探す）、TC45「好茶一杯，精神百倍」（よい茶一杯、元気百倍）、TC17「喝了碧落春，精神增三分」（碧落春を飲むと、元気三分増す）、TC83「茶没叶子不如水，人没钱了不如鬼」（茶は葉がないと、水にもかなわない、人は金がないと、鬼にもかなわない。）、TC84「各人吃各茶，各庙各菩萨」（それぞれ自分の茶を飲み、寺はそれぞれの菩薩を守る）、TC85「人在人情在，人走茶就凉」（人がいるとき、人情もあり、人がいないと、茶も冷えた）、TC58「冷茶饿酒断肠丸」（冷茶飢餓酒腸を断じる薬）、TC86「清茶胜酒，友谊更久」（薄い茶は酒に勝り、友誼も長く続く）

両言語の諺に見られる抽象および行為を表わす語句に関しては、日本語の諺では、年中行事（七五三）、儀礼（婚姻、葬送）、健康、仏教などと関係する語句が多く見られるのに対し、中国語の諺では、健康、年中行事（元宵節）、人間関係（友誼）、仏教（菩薩）などと直接的か間接的に関連する語句が見られる。

抽象を表わす語句に関しては、日本語の諺では、「縁起」、「難」、「災難」など仏教と関係のある語句が見られる（TJ4、TJ19、TJ38、TJ94）。仏教が伝来するとき、茶も遣唐僧によって日本に持ってこられたのである。そして、茶は、「死人」、「結婚式」、「結婚」（TJ96、TJ23、TJ88）という人生儀礼（婚姻、葬送）、「七五三」（TJ43）という年中行事との密接な関連も窺える。また、茶は「目の毒、気の薬」、「風邪」、「頭痛」、「中風」、（TJ9、TJ66、TJ75、TJ82）という健康養生とも関係している。そして、行為を表わす語句として、茶を飲まない、「嘘つき」（TJ97）になるというのがある。「書置き」（TJ65）は茶ですった墨を用いた文書で、そのまま遺書になって、その人が死ぬことになる。ところで、俗信とは関係せず、茶を飲む方法として、よい茶は飲んだら、ゆっくり置いて楽しんだほうがよいといっている（TJ47）。そして、TJ98の「余り茶」は茶筒の底に残った茶のことである。「福」があるというのは思いがけなくよいものが残る喩えである。

一方、中国語の諺 TC81 では、「毒」（毒）、「拉稀」（下痢）、「发痧」（暑気あたり）といったマイナスイメージの語句の引き立て役に、宵越しの茶を飲んではいけない、生の水を飲み、茶を飲まなかったら、悪い結果をもたらすと示唆し、正確な茶の飲み方を際立たせているのである。そして、TC82 では、年中行事の「元宵節」（お祭りの一種）に言及し、茶は普段の日常生活で欠かせないものとして扱われる。また、TC83 では、茶は、茶の葉がないと、水にも及ばないし、このことは、人が金がないと、地獄で一番地位の低い鬼にも及ばないことに似通っていると述べている。TC84 では、人間がそれぞれ自分の茶を飲むことと、寺のお坊さんが自分の寺の菩薩を守ることは、人間が自分のことしかかまわないことに当たるといっている。そのほか、TC58 では、健康養生の面から言うと、茶を飲むと、「精神」（元気）にもなるが、しかし、冷たい茶を飲んだら、かえって体に悪いことをもたらすという「断肠药」（腸を断じる薬）効果が

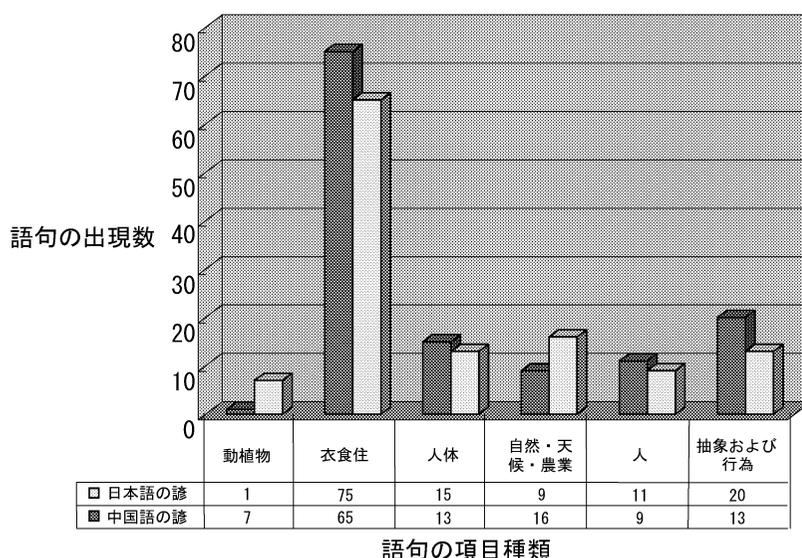
あると語っている。さらに、TC85、TC86 では、「人情」（人間同士の感情）、「友谊」（友情）といった人間関係を表わす語句も見られる。

4. まとめ

4.1 両言語の「茶」に関する諺に見られる取り合わせ語句の出現頻度

両言語の「茶」に関する諺を組み立てる語句は事項別によって、動植物、衣食住、人、時空、身体、抽象及び行為の六項目に分けてみる。諺の中で各事項別に見られる語句の分布はどのような形で構成されているかを下記の図 4.1-1 で示す。

図 4.1-1 両言語の茶に関する諺に現れる取り合わせ語句の分布



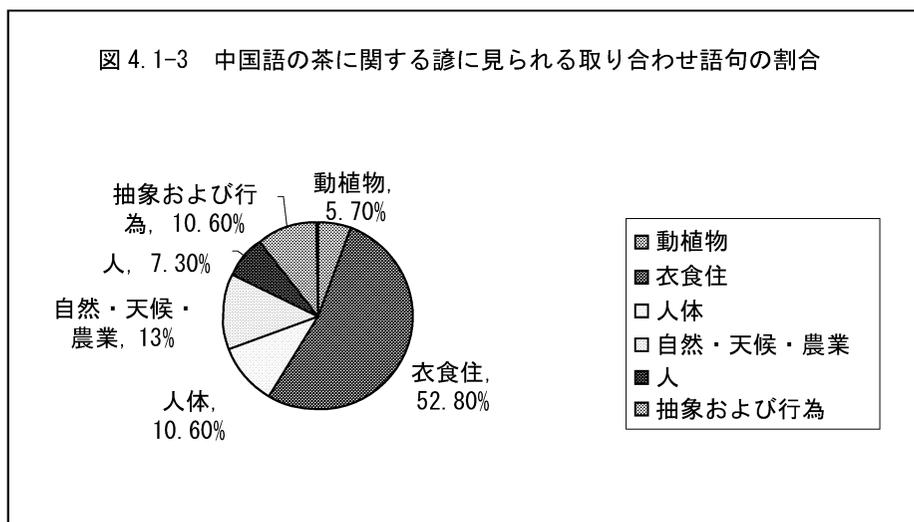
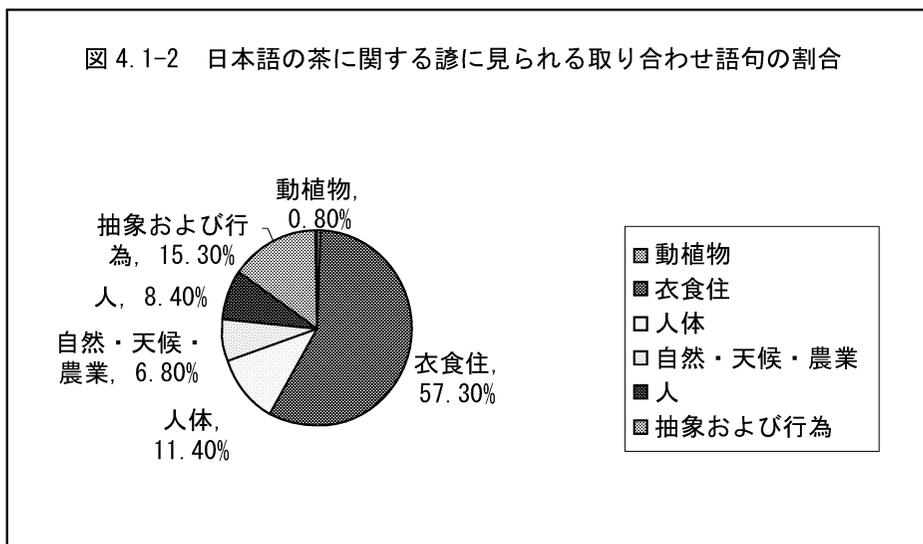
語句の出現頻度の高低による順位はそれぞれ、日本語の諺では、「衣食住」、「抽象及び行為」、「人体」、「人」、「自然・天候・農業」、「動植物」であり、中国語の諺では、「衣食住」、「自然・天候・農業」、「抽象及び行為」、「人体」、「人」、「動植物」であることが見られる。一つの諺に含まれる取り合わせ語句が一つのカテゴリーだけに限らないため、見られた各項目を表わす取り合わせ語句も諺の総数より多い。

これによると、日本語の諺も中国語の諺も出現頻度が一番高いのは「衣食住」に関する語句である。

両国の民衆にとって、「茶」は、やはり人間の身の回りにある日常生活の「衣食住」と密接な関係があると考えられる。「衣食住」の語句が含まれる日本語の諺は中国語の諺より数的に少し多い。ただ、「動植物」と「自然・天候・農業」と関わる語句では、日本語の諺が中国語の諺より少ないことから、中国の方が、茶の栽培事情を動物に喩え、茶の栽培、生長などを大いに重視していることが分かる。また、「人体」と「人」を表す取り合わせ語句の場合、日中

両言語の諺間では数的に格差が小さく、茶の人体への影響、茶と人との関係は両国ともに同程度あることが窺える。ただ、「人体」と「人」を表す語句の中で、それぞれ、茶の諺における意味が異なることは当然である。同じ人体部位や同じ人を表わす語句を用いても、諺に現れている内容が全く異なる場合がある。

また、取り合わせ語句が両言語の諺における百分率を、それぞれ下記の図 4.1-2 (日) と図 4.1-3 (中) の円グラフで表してみる。



まず、日本語の「茶」に関する諺に見られる各項目を表わす取り合わせ語句を六つの部分に分けて見る。その順位の中で、一番高い割合を持っているのは「衣食住」を表わす取り合わせ語句であり、57.3%を示している。茶は人間の日常生活と密着していることが窺える。また、「抽象及び行為」を表わす取り合わせ語句は全体の 15.3%を占めており、日本の「茶」に関する俗信及び俗説も普段多く見られることが分かる。「人体」を表わす取り合わせ語句は全体の

11.4%を示している。茶が人体への影響や人体と茶の組み合わせによる比喩表現がいくつか見られる。また、「人」と「自然・天候・農業」はそれぞれ 11.4%と 8.4%を示しており、茶と人との関係、茶と自然・天候・及び農業との関わりが窺える。

一方、中国語の「茶」に関する諺に見られる各項目を表わす取り合わせ語句は六つの部分に分けて見る。その順位の中で、全体の半分以上の比率を示しているのは「衣食住」を表わす取り合わせ語句であり、52.8%の割合である。それに次いで、「自然・天候・農業」を表わす取り合わせ語句が全体の 13%を示している。このことから、中国では、茶の栽培、摘み取りなどが自然、気候、農業に深い関係があると考えられる。すなわち、中国人は茶と「自然・天候・農業」の関係を重視している。また、同じ比率を持っているのは「人体」と「抽象及び行為」を表わす語句である。中国人から見ても、茶は人体に影響を及ぼすことは確かであり、人間社会における義理・人情及び人間の行為なども茶と関係していることが窺える。「人」を表わす取り合わせ語句は全体の 7.3%を示し「動植物」を表わす取り合わせ語句は全体の 5.7%を示しており、それぞれ茶と人、茶と動植物の関係が窺える。

この結果、両言語の「茶」に関する諺に「衣食住」を表わす語句が一番多いことから、茶は、人間の日常生活と密接な関係にあることが窺え、「動植物」を表わす語句が一番少ないことから、「茶」と動植物との関連付けが薄いと考えることができる。この二つの点は、両言語の「茶」に関する諺に見られる共通点であるといえる。「人体」と「人」を表わす語句の数は両言語の諺において、それほど大きな格差が見られなかった。

4.2 両言語の「茶」に関する諺に見られる取り合わせ語句の特徴

以上の両言語の茶に関する諺を組み立てている取り合わせ語句の特徴をまとめてみると、下記の表 4.2-1 の通りである。

表 4.2-1 両言語の「茶」に関する諺に見られる取り合わせ語句の特徴

		日本語の諺	中国語の諺
動植物	動物	動物を表わす語句が少ない。	動物を表わす語句が多い。
	植物	植物を表わす語句がない。	茶を「草」に喩え、摘む時期を強調している。
衣食住	衣	「着物」と「袖」は茶との取り合わせで、昔の社会を反映している。	
	食	茶の構成、茶の味、茶の品種、茶と食べ物との関係、嗜好品、茶の品質、茶の店などを表わす語句が諺の中に反映されている。 「茶漬け」と「朝茶」が多く見られる。また、馴染み深い海の魚も取り	茶の品種、名称、嗜好品「酒」に関する語句が割合と多く示されている。茶

	上げられる。	の栽培と関わる語句が見られる。
器具	茶を飲む道具と関連のある語句が多く見られる。	比喩表現で、茶は家具などとの関係が述べられている。
住	部屋にある各部分が見られる。	
人体	頭部に関する語句が割合と多く見られ、「腹」、「臍」、「心」、「踵」を使った比喩が見られる。	頭部と胴体部に関する語句が多い。主に、茶の正確な飲み方、茶の養生作用、茶と人間関係が見られる
自然・天候・農業	日本独自の暦日と関わる語句が見られる。	茶の栽培と生長環境に関わる二十四節気を表わす語句が見られる。
人	茶を飲む礼儀作法を述べている。	
	茶の俗信、家族関係が見られる。	色事、女に喩える語句が窺える。
抽象及び行為	年中行事、健康、仏教において、茶の役割を述べている。	
	七五三、冠婚葬祭、茶の俗信が取り上げられている。	元宵節、人間関係が取り上げられている。

諺の中で、取り合わせ語句が使われる数の多さによって、諺を創作する時、どんなことが民衆に親しまれているかが窺える (cf. 金子、『評論』1983, pp1-2)。具体的に今回の分析にあたり、取り合わせ語句を表わす項目から、次のような特徴が見られる。

まず、「動植物」を表わす取り合わせ語句に関しては、日本語の諺でも、中国語の諺でも、メタファーが用いられているところは共通点である。ただ、中国語の諺は、様々な動物で茶の生長と茶を飲む注意点を述べていることに対し、日本語の諺では、茶から茶と全く関わりのない物事の道理を導き出している。

また、「衣」を表わす取り合わせ語句に関しては、日本語の諺では、日本の伝統的な「着物」と「袖」を取り上げ、茶との取り合わせで、昔の遊女の生活が反映されている。一方、中国語の諺では、衣と対応し、茶と関連のある諺が見当たらない。「食」を表わす取り合わせ語句が多く見られる。日本語の諺では、「茶漬け」のような日本特有の食べ物を取り上げ、漁関係の語句と茶の関わりが窺え、中国語の諺では、中国では茶の栽培が盛んに行われ、茶の製法も異なるため、茶の品種の多さが窺える。「器具」を表わす取り合わせ語句に関しては、茶を挽く「茶臼」と「茶碗」が多く見られ、俗説・俗信として現れる諺が多い。このように、両言語の諺は茶の文化を背景とした興味深い比喩表現を形成している。

「住居」を表わす取り合わせ語句に関しては、日本語の諺では、部屋の各部分を表わす語句が諺に登場している。中には、俗説もあれば、比喩表現もある。一方、中国語の「茶」に関す

る諺では、「住居」を表わす語句が見当たらない。

「人体」を表わす取り合わせ語句に関しては、日本語の諺では、頭部の部位、例えば、「白髪」、「喉」、「鬚」、「目」が多く見られ、俗信と比喻表現も多く見られる。一方、中国語の諺では、健康養生の立場から、胴体部を表わす語句が割合多く見られる。

「自然・天候・農業」を表わす取り合わせ語句に関しては、日本語の諺では、日本独自の行事と暦日を表わす語句が見られ、中国語の諺では、茶の栽培、成長環境と関わる二十四節が見られる。

「人」を表わす取り合わせ語句に関しては、両言語の諺は共に茶を飲む礼儀作法に言及している。日本語の諺では、また茶に関する俗信を述べ、中国語の諺では、「医者」と茶の養生効果、茶と色事の関連、人間付き合いの注意点などを述べている。

「抽象及び行為」を表わす取り合わせ語句に関しては、両言語の諺は共に年中行事（日本は七五三、中国は元宵）、健康、仏教に言及している。日本語の諺は茶の俗信、俗説という形で現れることが多いので、茶を飲む禁忌を述べている。中国語の諺では、中国人は人間関係に対する考え方、中国の官界現状、中国人の現実的な見方を述べている。

参考文献

- 王 湘仁 (2001) 『中国飲食文化』 鈴木博 訳 青土社
- 王 雪 浮田三郎 (2011) 「日中の「酒」と「茶」に関する諺から見た取り合わせ語句の対照比較考察」『広島大学国際センター紀要』 第1号 広島大学 pp. 1-16
- 岡田 哲 (2003) 『たべもの起源辞典』 東京堂
- 温 端政 主編 (2004) 『中国諺語大全』 上海辞書出版社
- 金子武雄 (1983) 『日本のことわざ』 (全4巻)、(一) 評釈、(二) 続評釈、(三) 評論 (1983)、(四) 概説・講説 (1983) 海燕書房
- 金田一春彦 (1957) 『日本語』 岩波書店
- 尚学図書編 (1981) 『故事・俗信諺大辞典』 小学館
- 関本 至 (1983) 「現代ギリシア方言に見る諺の修辞法」『レトリックと文体』 古田敬一 (編) 丸善株式会社 pp. 1-30
- 西谷裕子 (2005) 『たべものことわざ辞典』 東京堂
- 布目潮瀨 (1989) 『緑芽十片 ——歴史に見る中国の文化』 岩波書店
- 布目潮瀨 (1998) 『中国茶文化と日本』 汲古書院
- 林 八龍 (2002) 『日・韓両国の慣用的表現の対照研究—身体語彙の慣用句を中心として—』 明治書院
- 矢沢利彦 (1989) 『東西お茶交流考』 東方書店
- 矢沢利彦 (1995) 『東のお茶 西のお茶』 研文出版
- 朱 自振・沈漢 (1995) 『中國茶酒文化史』 文津出版社